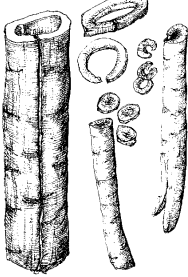


音順	生薬名	中医の性味・帰経	中医の用量
ほー13	ぼたんび 牡丹皮	中医学生薬解説、参考・使用上の注意 および中医学以外の生薬解説・生薬学解説 苦・辛・微寒 心・肝・腎	6~12g、煎服。
中医生薬解説			
 <p data-bbox="422 685 569 715">ボタンの根皮</p>		<p>清熱涼血 熱入営血の夜間発熱、皮下出血、吐血、鼻出血、舌質が絳などの症候に、犀角・生地黄・赤芍などと用いる「犀角地黄湯」。</p> <p>慢性病の陰虚発熱や熱病の後期で、余熱が陰分に伏し、夜に微熱がでる出るときに、青蒿・鼈甲・知母などと用いる「青蒿鼈甲湯」「知柏地黄丸」「清骨散」。</p> <p>血虚による月経前の発熱にも、山梔子・青蒿・地骨皮・熟地黄・白芍などと用いる。</p>	<p>活血散瘀 瘀血による無月経、月経痛、腹腔内腫瘍などに、桃仁・赤芍・当帰・紅花などと用いる「桂枝茯苓丸」「膈下逐瘀湯」。</p> <p>打撲外傷による腫脹、疼痛に、赤芍・乳香・没薬などと用いる「牡丹皮散」「牛膝散」「折衝飲」。</p> <p>瘀熱蘊結による腸癰（中垂炎など）の腹痛、便秘に、大黄・桃仁・冬瓜子などと用いる「大黄牡丹皮湯」「腸癰湯」。</p>
		<p>清肝火 肝鬱化火による熱感、頭痛、目の充血、頬部の紅潮、口が渇く、月経不順などの症候に、山梔子・柴胡・白芍・当帰などと用いる「加味逍遥散」「丹皮野菊湯」。</p>	
		<p>参考 清熱涼血には生用（粉丹皮・丹皮）し、活血消瘀には酒炒（酒丹皮・炒丹皮）し、止血には炒炭（丹皮炭）して用いる。</p> <p>牡丹皮・生地黄は陰虚発熱に用いるが、生地黄は甘寒滋陰し、陰を生じることにより退熱するのに対し、牡丹皮は清芬透達して退熱することにより、陰を生じさせるという違いがある。</p> <p>牡丹皮・桂枝は行瘀の効能をもつが、桂枝は温性で血寒の瘀滯を通じ、牡丹皮は寒性で血熱の瘀滯を通じる。</p>	
		<p>使用上の注意 通経活血に働くので、妊婦や月経過多には用いない。</p>	
中医以外の生薬解説			
神農本草経		辛寒、寒熱中風痲痺驚癇邪氣を主どり癥堅瘀血腸胃に留舎するを除き五臓を安んじ癰瘡を療す。	
薬 徴		仲景之方中、 桂枝茯苓丸・八味丸・大黄牡丹皮湯 、以上三方、 牡丹皮 ありと雖も、而も以て主薬とならざる也、此の如きの類は皆其の全方面の主治に従ひて之を用ふ徴の如きは姑く闕く、以て後人の君子を俟つなり。 雖も、而も、闕く、以て、俟つ	
新古方薬囊		味辛寒で、内の熱を散じ、結滯を浄め消するの効あり。	